

文書蔵 2

「おしゃべりは大事」

日本人の自殺者が毎年 3 万人を越えるという。大変な事態である。その要因の一つとして個人の孤立化がある。情報がインターネットを使って自由に手に入る時代となった。必要のないものまで大量に入ってしまう。またその逆でまったく入らなくなってしまう人もいる。

個人情報保護法などで、一部行き過ぎた極端な縛りが出来てしまっている時代背景があるのは間違いない。口から口への伝達が中心だった時代なら、伝達や広報についてもさほど責任はない。かえって、広報者は少し誇張しながら話し、場合によると英雄になったりした。

何が変わったのだろうか。足りないといえば、言葉をしゃべることだ。

人の人とかかわりと言葉のイントネーションから来る感動ではないか。「ばか」という言葉を使っても、文字だけでは「ばか」は、「ばか」侮蔑しか表現できないが、イントネーション次第では、「愛しているよ。」「どうしたの。」「まったくしょうがないね。」「いいよ……」と意味あい、まったく逆意味まで取り揃えられている。

感じ取るそれが日本人が持っている日本語だ。メールの絵文字はそんな文字だけでは表現しきれないものを表そうとしている。

文書蔵 3

「大丈夫だよ。貴方のせいではないよ。」

私は、庭づくりをする職業を持っている。若い頃、外国に行き、庭というものを勉強した。庭は、その国の宗教観がいっぱい入っている。キリスト教、仏教、イスラム教、ヒンズー教等々、世界には数多くの宗教がある。そのすべてに共通する教えが、「大丈夫だよ、貴方だけの、せいではありません。話してみなさい。それは、貴方に与えられた修行だよ。こうすればいいんだよ。さあ・・・」と教えているのです。

そして庭は苦しみを乗り越えたところにある景色を表現したもの。

人の苦しみとはどこから来るのか。

人は皆、本能から来る自分自身の生き方をもっています。しかし、本能は個々の領分、弱い者の集まりは組織化を好む。数の多さを頼る。霊長類もその一つで、もちろん人間もである。

よって、組織の決まりを重視する。「決まり、おきて」をもって命をお互いに守っているのである。これもまた本能である。そのシステムを体で覚え、教え、導くために人間の体力、精神力の限界を知る必要があるため、その時代、年代の代表として修行僧はそれを知るために行をする。

体を動かそうとする力を気力とし、その出し方、使い方の方法を会得したものを、人に説き教えると宗教となるわけです。ただ、そのおかれた条件や環境が違うため、発生の所、

時代によって、それぞれに違いが生じてきた。これが、この地球上に多数の宗教がある原因となっている。

一人で生きていけない人間族にはこの組織の決まりやおきては、必要なものであろう。日本人は戦後日本人が持っていた精神的支えの、よい意味での宗教観を落としてきてしまった。組織の中の自分から、抜け出した個の自分を成功者と勘違いしているのではないか。お金や地位を得るために捨ててしまったようだ。本当にこれでよいのか。人間、重き荷を背負って山道を歩くようだと言っています。成功すればするほど、組織には入れない個の自分で生きていかねばならなくなります。その精神力や身の守りや環境まで自分で確立をしていかねばなりません。しかし現在ではその準備がないまま、個を作ってしまう環境が、どの人にも与えられてしまったようです。さあ、大変です。貴方は、自分が背負ったリュックサックに何をいれますか。お金ですか。人ですか。名誉ですか。食べ物ですか。着るものですか。住むものですか。人が荷をかついで山道を歩ける重さは30キロです。さあ・・・貴方なら。

迷っていますか。「大丈夫です。貴方のせいではありません。」話してみませんか。

文書蔵 4

「世界を変えたければ、まず自分を変えよう」・・・マイケルジャクソン

耳に残った最近の言葉。いや これ、ずっと昔からあった言葉ではないか。

「人を変えたければまず自分から変えよう。」「周りを変えたければまず自分から」なんて言葉あったよね。

結構、わたしは、臆病である。何か目立ったことをすると、やった嬉しさと、やってしまった自己嫌悪がおこる。安定していれば別に多少の不満があっても、少し我慢をすれば波風立たなくて、それはそれで快適なのではないかと、多くの日本人は思う。

私もまた普通の日本人なのでしょう。でも、それで将来、何かをあきらめてしまった自分が残ってしまうのではないか。それで満足なのですか。自分が褒められますか。だったらやってみて失敗をしてもやった自分が褒められるのではないか。臆病な自分を変えて見ようや。はっきり物を言う努力をしてみようや。「それはいい」「それはよくない」とだけでも言い切ってみようや。

これはきっかけの言葉かな。周りの評価を考えるなら、まずこれをやると決めた事。そうこれだ。「組織の中の個の始まり」

文書蔵 5

「先生に権威と力を」

学校の先生って、何時からこんなに守りになってしまったのか。ちょっと前まで先生は怖かった。

理由はたくさんあろう。でも、人に物を教える人って、怖いくらい強い人ではなかったろうか。その頑固なくらい自信のある態度と言葉に尊敬という感動があった。そして真似をするという学習があった。

子供って何をしたら怒られるのか。何をしたら褒められるのかを知りたいのだ。

その組織や社会の中の常識的な基準を初めて教えてくれるのが教師ではないか。小学 1 年生の頃はまさにその年代ではないか。それまでは各家庭での家族の常識がきまりであった。そしてその常識からもっと大きい社会に出る時、いろいろの考え方の家庭から守られてきた状況から、親離れをし始めてくる。親御さんも自分の考えはあると思うが、他人に託してみませんか。

大事な子供だから意見も言いたいでしょうが、親の決めた枠のなかで育った子供って、将来本当に親の満足のいく子供に成長するのでしょうか。いつも親の庇護下にいる子供になってしまうのではないのでしょうか。安心感はあるがどことなく物足りないものです。昔から、跡継ぎをさせる子供を、成長させるためには、まずは自分の支配下に入れずに、他人の飯を食わせるって、そういうことでしょうか。親を超えとは親の最大のライバルになって子供が登場するということでしょうか。これには自分以外の師匠が必要。

先生、教師は聖職といわれています。聖職って仕事に殉死できる職業と考えます。だからすごい職業なのです。ある意味では人の命を左右する医師以上かもしれません。人の人生すら左右する職業と思います。だから腹をくくってそして自信を持って教えることに当たるべきです。それには先生にはもっと権限を与え文句をつけてくる人たちに頑として立ち向かい揺るがず、そんな胆力がほしい。そして何より教育委員会はそんな先生を守ってやるべき。そんな文部省がほしい。先生の立場を作ってやらねばと思う。そして先生こそ殻の中に居ないで、一般の世界に数年出て、経験をつむ必要のある職種だと思う。

先生が強くなっていくためには他人の飯を食ってみること。そこから得た自信なら子供に是非教えていただきたい。その生き方を。